

17/07/24

米中関係、緊張と安定の2つが過去最大のニューノーマルに(アジア特Q便)

QUICKではアジア特Q便と題し、アジアの専門家による独自の視点をニュース形式で配信しています。今回は、日本総合研究所理事で米中関係に詳しい呉軍華氏がレポートします。

■米中関係、半年で歴史的な緊張から緩和を繰り返す

トランプ政権が発足して半年がたった。短いようで長いこの半年間において、実に色々なことが起きた。こと米中関係についてみると、なおさらである。

4月初めの米フロリダで催されたドナルド・トランプ大統領と習近平国家主席の初の首脳会談を境に、米中関係は国交回復来で最悪と評されたほどの緊張から一気に緩和の状態に変化した。そのほぼ三ヶ月後、トランプ政権発足半年を直前に控えてまたもや緊張の機運が大きく漂うようになっている。

日本を含み国際社会を大きく震撼させたリチャード・ニクソン大統領の訪中をはじめ、アメリカと中国は過去四十年来の世界に大きなサプライズを与えてきた。それにもかかわらず、米中関係が僅か半年の間にこれだけ激しく揺れ動いたのは初めてだ。なぜ、こうした激動が起きてしまったのか。

■中国の台頭でパワーバランス崩れる

最大の原因はトランプ政権の発足を境にした米中関係の本格的な冷和時代への突入だ。米中関係のこれまでの揺れ動きに象徴されている通り、アメリカと中国は両国の関係についてかねてから緊張と安定という相容れない二つの要素を抱えていた。この意味で、冷和構造は歴史的に存在していた。

アメリカがイデオロギー・価値観から経済、軍事までほぼすべての分野のパワーバランスで一極的な存在を維持していたため、米中関係はこれまで全体として安定を基調に推移してきた。局地的な対立によって米中関係が一時的に緊張してもすぐ安定の軌道に戻った。

こうした流れに大きな変化をもたらしたのは中国のWTO加盟(2001年12月)と国際金融危機(2008年)だ。中国がWTO加盟を起爆剤に経済のテークオフを果たした後、2008

年の国際金融危機を契機に政治・軍事大国としても大きく台頭してきた。

■緊張と安定の2つが未曾有のレベルに高まるニューノーマル

中国の台頭と対照的に、米国はエリート民主主義から大衆・サイバー民主主義への進展によりリベラリズムが一部で行き過ぎた。アメリカの民主主義の劣化が進んだとともに、経済システム的に日米欧と異なる体質を持つ中国が世界経済を動かすビッグプレイヤーの一つとなり、グローバル化の流れに大きな変容をもたらした。

米中、引いては世界を動かすパワーバランスはアメリカへの一極集中から中国の方に大きくシフトした。アメリカと中国の関係は21世紀の世界の覇権を争うような関係に変化したものの、経済だけでなく国際秩序の維持とグローバル的な課題への対応などにおいて相互依存の度合いがむしろ一層強まってきた。

両国の関係を緊張に引っ張る「冷」の力、安定に導こうとする「和」の力も未曾有のレベルにまで強まり、米中関係は本格的な冷和の時代を迎えた。

こうした判断が正しいならば、この半年の激しい揺れ動きが決して一時的な現象ではなく、今後の米中関係を規定するニューノーマルとして捉えるべきだ。少なくとも今後しばらくは米中という国際社会を動かす二大プレイヤーに翻弄される日が続くだろう。